

松村延昭先生のことば、その教え

福 島 祥一郎

松村延昭先生の詳細なご経歴については巻頭の紹介文に掲載されるとのことなので、本稿では編集委員からの依頼に沿う形で松村先生との思い出や個人的なエピソードについて述べていただきたい。

とは言え、実際に私が松村先生とともに同志社女子大学で過ごした時間は非常に短く、私が着任した2019年から松村先生がご退職される2023年の4年間に限られる。またその4年という歳月にしても、2020年の3月以降、新型コロナウイルスの猛威により「三密」（今ではこの言葉も随分と遠い昔のように感じられるが）を避けるため対面での他者との関りを極力持たないことが推奨され、特に食事やお酒を共にすることは難しくなってしまった。同じアメリカ文学を研究する者として、松村先生のご経験やお考えに深く接する機会を持ちたいと入社時に強く願っていたにもかかわらず、そうした機会をほとんど持てないまま先生のご退職を迎えてしまったことは、痛恨の極み以外のなにものでもない。新型コロナウイルスとは、存在したであろう「道」を、あるいは思い描いていた人生の航路を大きく変えてしまう、本当に「罪深い」ウイルスであると改めて思わずにはいられない。

それでも、印象深い出来事はいくつもあった。そのひとつに、2022年1月頃、私が松村先生の研究室を訪れた際の出来事がある。その頃、私自身は大学教育における文学に位置づけについて悩みを抱えており、私の人事（准教授人事）についての報告も兼ね、先生のお部屋を訪ねた。松村先生は私の突如の訪問にも嫌な顔ひとつされず、美味しいコーヒーを丁寧に淹れて、私を歓迎してくださった。私の話はありきたりの、つまらないものであったと記憶している。しかし、松村先生は私の悩みに真摯に耳を傾け、英語英文学科として「芯」を忘れるべきではなく、その「芯」には文学が不可欠であると

いう認識を示してくださった。そのこととばのひとつひとつに、文学が持つ力、文学の面白さへの揺ぎない「想い」が詰まっていた。

松村先生はいつも親身に話を聞いてくださり、その鷹揚で柔和な物腰は他者を惹きつけてやまなかった。と同時に、文学へ深い愛情をいつも内に宿されている先生でもあった。そうした優しさ、懐の広さ、そして文学への愛は学生にも強い印象を残し、松村先生のゼミはいつも盛況だった。二年次生を対象にした英米文学基礎ゼミナールでは、英語圏作品、特にアメリカ文学に学生が多く触れられるような工夫をされており、そこでアメリカ文学の薫陶を受け、その面白さに目覚めた学生を私は何人も知っている。今年度、私のアメリカ文学ゼミを志望してきた学生の志望理由には、「基礎ゼミでたくさんアメリカ文学作品に触れ、物語を読み込んでいくことの面白さに気づいた」という声がいくつもあった。その声の裏側には、文学の可能性を信じ、文学の魅力をまっすぐ学生に伝え続けた松村先生のご努力と強い信念があったのだと思う。

本稿の依頼を受けた際、果たして私が本稿を執筆するべきか非常に悩んだ。また、お引き受けした後もその思いは消えず、他の多くの先生方を差し置いて私の拙稿を先生への贈る言葉とすることに申し訳なさを拭うことができなかった。ただ本稿を執筆する過程で、松村先生との関りはささやかなものであったかもしれないが、その一方でその一瞬一瞬には深い教えがあったことに改めて気づくことができた。それはこの上ない僥倖であった。

最後になりましたが、松村先生、長きに渡り同志社女子大学英語英文学科の発展と教育にご尽力くださいましたこと、深く感謝申し上げます。先生のこれからの益々のご活躍を心より祈念しております。